

# ふるさとファイル

展示コーナーだより

第14号

平成15年12月  
長岡京市立図書館



## 梵鐘秘話

大晦日、「ゆく年、くる年」に思いを馳せて、この日ばかりは、除夜の鐘に心をかたむける人も多いことでしょう。

梵鐘の歴史の一コマを紹介し、その音色の余韻を味わってみましょう。

展示期間：平成15年12月3日(水)～

平成16年2月1日(日)

### 戦争の災禍

梵鐘は、寺院で時を知らせたり、法会のために人々を集めるために用いられるもので、仏教とともに日本に伝来しました。私たちには「釣鐘(つりがね)」というよび方のほうが馴染み深いでしょう。

ところが、全国各地でつくられてきた多くの由緒ある梵鐘は、第二次世界大戦中に一部の古いものを除いて鋳潰され消滅し、その数は全体の9割に及ぶといわれています。

この地域の梵鐘も例外ではなく、乙訓寺・光明寺・勝龍寺・楊谷寺など主なお寺の鐘は、小型の半鐘を除いて、すべてこの時になくなったのです。

戦後、平和の訪れとともに新しい梵鐘が作られていきますが、失われた歴史は二度と戻ることはありませんでした。

乙訓寺のもとの梵鐘は、元禄9年(1696)中興の祖隆光の銘文をもち、四天王像や牡丹獅子唐草文が配され、由緒と端麗さを兼ね備えた大切な寺宝でした。混乱した時勢のなかで残された写真や拓本に、寺宝に対する深い愛惜の念が伝わってきます。

この供出された梵鐘のかわりに、昭和41年、もとのとおりの新しい梵鐘が再鋳されましたが、四天王像の陽鋳だけは、種子(しゅじ：仏や菩薩を表す梵字)に変わりました。



供出前の乙訓寺梵鐘の写真(乙訓寺所蔵)



再鋳された乙訓寺梵鐘の持国天種子

(昭和42年 久保仁平氏採拓)

## 勝龍寺梵鐘三代

現在、大阪府能勢町の真如寺に掲吊されている梵鐘は、全面に梵字が刻まれた鎌倉時代の古いものです。銘文にあるように、これはもと勝龍寺の梵鐘としてつくられたもので、大坂夏の陣の時に持ち去られたと伝えられています。

江戸時代になり、勝龍寺では明和3年(1766)に梵鐘と鐘楼が新調され、「時の鐘」として村人に親しまれていましたが、昭和20年3月、またもや戦争の供出で失われてしまいました。

梵鐘のない鐘楼(明治29年再建)は忍びない姿で、檀家一同で新しいものをつくることになりました。初代の真如寺の鐘を返してもらおうという動きもありましたが、それはかなわず、戦後30年を経た昭和52年、ようやく地元念願の新しい梵鐘が再び新調されたのです。

山城国乙訓郡神足郷  
勝龍寺 洪鐘鑄事  
元応元年 五月十日

大工 清原得光  
小工 右衛門尉山河助綱

大阪府豊能郡能勢町  
真如寺蔵の梵鐘銘文

## 梵鐘と鐘楼

梵鐘は、鐘楼や鐘楼門を建てて吊り下げ、撞木で撞いて、その荘厳な音色を鳴らします。

現在光明寺本堂の東南にある鐘楼は、明暦3年(1695)もしくはその翌年の建築で、享保の一山焼失を免れた古いものです。

「諸国寺社鐘銘録」によると、この鐘楼には中興の祖倍山の代、明暦3年銘の梵鐘が吊るされていましたが、鐘は供出されてなくなりましたが、ともにつくられた鐘楼のみが、今もその由緒を伝えているのです。

現在の梵鐘は終戦の翌年、昭和21年につくられたものです。朝夕、西山に響きわたる鐘の音色の余韻には、戦争でうけた災禍の深刻さが込められているようです。



光明寺の鐘楼

### 参考文献

『長岡京市史』建築・美術編

梵鐘や半鐘をはじめ、市内寺院の金工品を集成しています。執筆担当の久保仁平氏は、昭和40年代からこの地域の梵鐘や半鐘等の調査・研究を行われ、金工品の学術的な研究に大きな成果をあげられました。市史編さん事業終了後、長年にわたり採拓した拓本を、地元のためにと寄贈していただきました。